

〔論文〕

男性とダブルケア経験

——子育てと介護を同時に担う男性へのインタビューを通して——

澤田 景子・松浦 由美子

名古屋学院大学現代社会学部／名城大学

要 旨

本研究は、子育てと介護を同時に行う男性8名にインタビュー調査を行い、定性的コーディングを用いた継続的比較分析を用いて、その経験世界を明らかにするものである。近年、少子高齢化に伴い、子育てと介護を同時に担う状態である「ダブルケア」が注目されるようになったが、その主体は主に女性とされ、男性ダブルケアラーの経験世界についてはほとんど明らかにされていない。本研究では彼らの日々の経験を丁寧に紐解き、その実情や直面する課題、悩みを明らかにし、求められる支援のあり方について考察する。さらに、ダブルケアに向き合う男性の意識から、彼らが行う「家族を守るためのマネジメント」に注目し、家庭内での役割分担やジェンダー意識の変化についても考察を行う。

キーワード：男性とダブルケア，経験世界，ジェンダー意識

Men's experiences of double care:

Constant comparative analysis of interviews with men
raising children and caring elderly family members

Keiko SAWADA・Yumiko MATSUURA

Faculty of Contemporary Social Studies
Nagoya Gakuin University / Meijo University

1. はじめに

「同居の主な介護者」の3人に1人が男性となり（厚生労働省 2022）、また積極的に子育て役割を担う男性を指す「イクメン」ももはや流行語ではなく定着した感のある現在、子育てと介護を同時に担う「男性ダブルケアラー」の存在もまた稀有なものではなくなっている。内閣府男女共同参画局（2016）の調査によればダブルケア人口は推計で約25万人だが、そのうち約1/3にあたる8万人が男性である。しかしながら、ダブルケア研究においては男女ともに実施された量的調査（内閣府男女共同参画局2016、ソニー生命ら2017）はみられるものの、質的調査のほとんどが女性を対象としたものであり（澤田・伊東2018、澤田2020、成田2018）、男性に焦点をあてた研究は未だないのが現状だ。男性ダブルケアラーが抱える負担感など、その主観的世界についてはほとんど明らかにされていないといえる。

実際、ダブルケアラーを取り巻く状況には男女で顕著な違いがみられることが過去の量的調査から明らかになっている。ダブルケアの主な担い手は男女ともに30代から40代が約8割を占めているが、男性ダブルケアラーは約9割が就業しており、女性に比べ子育て・介護ともにメインのケアラーではない割合が高い（内閣府男女共同参画局 2016）。さらに、ダブルケアにより離職や業務量を減らした者は、女性は約4割であるのに対し、男性が約2割と低くとどまっており（内閣府男女共同参画局 2016）、男性ダブルケアラーは女性に比べて経済的負担や仕事との両立の問題を重荷に感じている。またダブルケアを担う理由として、女性は「自分以外に主にできる人がいなかった」が最も多い（62.4%）のに対し、男性は「自身の希望で主に関わりたい」と回答するものが最も多い（60.7%）など、意識の違いも明らかになっている（ソニー生命ら2017）。女性ダブルケアラーとは異なる、男性ダブルケアラー特有の状況や問題、負担の内実を明らかにする必要があるだろう。

少子高齢化、晩婚化、晩産化が進展する今日において、ダブルケアに直面する男性は今後も増加が予測されている。男性ダブルケアラーがどのようなことを感じ、どのような負担や矛盾を抱え、どのように自身が折り合いをつけ日々やりくりしていくのかという経験世界を紐解くことは、子育てと介護に関わる男性の実際のニーズに即した支援体制を検討し構築していくうえで必要不可欠なことである。本研究は男性ダブルケアラーへのインタビュー調査を通して彼らの経験世界に迫り、その現状や課題、ニーズについて明らかにすることを第一の目的としている。

またそれらを明らかにすることは、従来女性に負担が偏りがちであったケア領域における男性の役割と居場所について考察することでもある。家内領域で行われる子育てや介護などのケア労働と家事労働は従来女性のものとされ、今もその意識は根強い。男性稼ぎ主型家族の形が大きく変わりつつあるなかで、男性とケアをめぐる状況はどのようになっているのか。男性ダブルケアラーらは子育て・家事・介護をどのように担っているのだろうか。その行動や決断を自身はどのように説明するのか。男性ダブルケアラーが抱える負担は、女性ダブルケアラーのそれとはどのように違うのか。男性ダブルケアラーの語りから、ケア労働や家事をめぐるジェンダー意識や家族規範が、現在の家族を「生きる」男性のなかでどのように変化しているのかを読み取ることができるのではないだろうか。そこで本研究では、男性ダブルケアラーを取り巻く現状を整理したうえで、インタビュー調査により彼らの

経験世界を明らかにし、求められる支援について具体的に検討し、さらにそこから家庭内での役割意識をめぐるジェンダー意識の変化について考察を行うこととする。

2. 男性ダブルケアラーを取り巻く現状

繰り返しになるが、「男性ダブルケアラー」とは子育てと介護を同時に担っている男性のことを指す。高齢者介護や子育て、家事も含めた「ケア」は従来、「母」「妻」「娘」である女性が担うものとして、家族という私的領域のなかに閉じ込められてきた。そこにおけるケアを自明視することで、男性が自律した個人として公的領域に存在してきたのが近代社会である。日本社会では戦後、夫が外でサラリーマンとして働き、妻は家で家事と子育てに専念するという性別役割分業に基づいた近代家族が一般化した。社会学者の上野千鶴子が「ケアは『ジェンダーまみれ』の用語であり、ケア問題とはジェンダー問題である」（上野2011：51）と明言しているように、ケアをめぐるジェンダー的配置とその歴史に無自覚なまま、男性ダブルケアラーの抱える問題について語ることはできないだろう。

春日キスヨは著書『介護とジェンダー』（1997）において、介護をめぐる夫婦間のジェンダー力学について論じている。従来の「嫁」介護が減少し、老老介護や娘介護が増えていっている1997年当時の状況を指摘しながら、春日は男性たちがさらに介護を忌避していく方向になるのではないかと論じている。なぜなら、伝統的な家族観に基づく家族への介護期待と、愛情で結ばれた夫婦という平等主義的な家族観が併存するなかで、息子が親の介護を実際に担ったら、妻よりも親への愛情が優先されたということで、それ自体が夫婦に軋轢を生んでしまうからである。介護は女の役割とされている社会では、妻が娘として親の介護を引き受けた場合、その役割は「当たり前」であるから夫がそれに「承諾」を与えることは寛容さの表れとされ、夫婦間の愛情の問題とはならない。しかし、男が「わざわざ」介護を担ったとき、それは親への愛情の表れであり、夫婦間の愛情が犠牲にされているととらえられるのである。そのために男性は自分の妻と子、そして親という二つの家族の間で選択を迫られることになる。

（前略）親世代、子世代の家族が別居するのが普通になった今、親とのコミュニケーション能力、生命を支える日常生活能力を身につけていない多くの男たちが、別居していた親が倒れ、その介護を引き受けることを他の兄弟たちから求められたとき、取り始めている方向は「どんなに誘われてもなじられてもいい。親きょうだいの縁を切っても、自分の家族（妻と子でつくっている）を守る」という選択ではないだろうか。妻と子にとっては喜ばしい選択にも思える方向ではある。しかし、自分の生まれた家族をとるか、つくった家族をとるかの二者択一の選択しかないようなところに、男性優位の社会に生きる一人の人間としての男性の不幸があるように思えてならない。（春日1997：45）

「二者択一の選択肢」のなかで「自分の家族を守る」という選択をするために、男性は介護役割を回避するのだと春日は論じているが、2001年の著作『介護問題の社会学』においては、妻の介護に

手出しができずに遅い帰宅や酒・パチンコ等へ逃避する中年男性を描写しながらも同時に、「次代の息子たちは否応なく家事も介護技術も身につけて現実に立ち向かわなければならないだろう」（春日2001：131）と、次世代における変化に言及している。この「家事も介護技術も身につけ」ながら、自分のつくった家族も「守る」というのが、男性ダブルケアラーであるといえよう。

実際男性介護者は確実に増加傾向にある。男性介護者に注目してきた津止正敏は、従来一般的であった「嫁介護」が大幅に減少し、「配偶者介護」や「実子介護」へと移行する現状をデータから読み取り、「既に介護担い手における性差は縮小傾向にある」と指摘している。特に、「娘介護」が微増なのに対して「息子介護」の割合は数倍になっている（津止2022：467）。男性介護者のなかでも特に息子介護者に着目する平山亮は、この理由としてまず根本に子どもの数の減少を上げ、晩婚化・非婚化と雇用の不安定化によって親元を離れない息子が増え、その息子が同居する親の介護を「自動的に」担う、あるいは息子が結婚していても、妻もまた妻の親にとっては数少ない子であるために夫の親の介護まで引き受けられず、従来のような「嫁」による介護を期待できないといった構図で説明している（平山2014：34-37）。

また、性別役割分業に基づいた戦後の日本の家族モデルは、1985年の男女雇用機会均等法、1999年の男女共同参画基本法などを経て確実に平等主義な形へ変わりつつあり、女性にはさらなる経済的役割が、男性にはさらなる子育て・家事役割が求められるようになっており、実際男性の家事時間は少しずつではあるが増加傾向にある¹⁾（総務省 2022）。しかし、生活時間全体に目を向けると、日本の男性の有償労働時間は452時間とOECD11か国中最も長く、また無償労働時間は41分と最も短い。有償と無償とを合わせた493時間という労働時間全体はアメリカに次いで2位という長いものであることから（内閣府男女共同参画局 2023）、男性がさらに子育てや家事の役割を担っていくためには、まずは有償労働時間の減少が必要なのではないかと考えられる。

しかしながら、ここで留意したいのは、男性にさらなる子育て・家事役割が求められているなかで、男性の稼ぎ手役割意識は強固に維持されているという点である。2004年にジェンダー社会学研究会が行った東京都内在住の成人男性3,000人を対象とする調査において、男性の自立にとって「家族を養うことができる」を「とても重要」としたのは71.6%、「やや重要」とした25.1%と合わせると96.7%となり、稼ぎ手役割意識が非常に強固であることが窺える（目黒ら編2012：200）。また社会学者の大槻奈己は、同調査から雇用の不安定さや転職・離職経験が男性自身の稼ぎ手役割意識に影響を与えていないことも明らかにしている。転職・離職経験によって性別分業に関するジェンダー意識が弱まっても、稼ぎ手役割意識のみは、依然として男性にとって「もっとも中核に」あるのだという（大槻2012：150）。

心理学者の大野祥子もまた、男性の家族関与の高さが必ずしも職業役割・稼ぎ手役割としての男性ジェンダー規範からの自由度の高さを表してはいないと指摘している。男性にとって職業役割とは「単に生活上・経済上の必要に迫られて消去法的に引き受けるものではない」。それは『『強い』男性が（強くない）女性と子どもを犠牲的精神で守る』という「男性性の本質の現代的な表現のしかた」であって、「アイデンティティの一部」なのである（大野2016：92）。

家族を守る、とは本来様々な形があるはずである。しかし近代社会において男性が行う場合それは、

公的空間においてなされなければならない。江原由美子は「英雄的男性性」「立身出世的男性性」といった戦前は複数あった男性性の実現の形が、戦後「稼ぎ手になる」ことに特化されていったと述べている。「国に命を捧げる」「故郷に錦を飾る」といった公的空間における男性性実現のストーリーが、戦後失われ、経済的役割のみが残ったのである。男性性の実現が稼ぎ手役割以外では難しくなったこと、また女性は家庭にとどまって家事や子育てを担うという役割観により女性が職業世界から撤退していったことから、男性が家族を守ることがすなわち稼ぎ手役割を果たすという意味を一義的に獲得していったのである（江原2012：31）。

1980年代以降の女性の社会進出に伴って、女性は「仕事・家事・育児・介護」という重層的な役割を担うようになってきていると指摘されてきたが（岩上2007：85）、男性が子育てや家事に関して平等主義的な意識をもちながら、稼ぎ手役割意識も手放せないのだとすれば、男性も同様の重層的な負担を担っている状況が出現しつつあるといえる。また旧来の「家」制度的な価値観のもとでは男性は自身の親の面倒だけみればよく、またその実質的な世話は「嫁」である妻に任せておけばよかったが、妻との関係が平等なものである以上、少子高齢化社会のなかで自分と妻双方の親（ときには祖父母）の介護問題が申し掛かってくるのである。実際本研究においても妻方の親、あるいは祖父母の介護に関わっている男性ダブルケアラーは8人中3人おり、決して少ない数ではない。直系家族規範が薄れ、平等主義的な意識をもつ現代の夫婦にとっては、双方の定位家族²⁾をも平等に扱うことが期待されるのである。

稼ぎ手役割意識が維持され、子育てや家事役割を求められ、さらに双方の定位家族のケアも視野に入れなければならない状況で、男性ダブルケアラーたちは何をどのように担い、その状況を理解し、日々対応しているのだろうか。またその状況とそこからもたらされる負担感や支援のニーズは、同様に多くの役割を引き受ける女性たちのそれとはどのような違いがあるのだろうか。

3. 研究方法

本研究では、子育てと介護が同時期に発生する状態にある、もしくは過去に同様の経験をもつ30代から50代の男性8名を対象としインタビュー調査を実施した（表1）。夫婦間における家事やケアの分担、またその合意形成の過程に着目するためひとり親家庭は除外した。実施時期は2023年7月から11月、インタビュー時間は1回あたり60分から90分程度で、対面もしくはZoomを用いたオンライン形式で行った。また調査は、インタビューガイド³⁾を意識しつつ半構造的に行い、研究協力者の了解を得たうえで録音し、逐語録を作成した。

分析は、質的データ分析法（佐藤2008）を参考に、定性的コーディングを用いた継続的比較分析とした。手順としては、①逐語録から文意がわかる程度のまとまりのある文章をセグメント化する、②共通のテーマを有する複数のセグメントを相互に比較し相応しいコードを生成する、③類似性のあるコードを説明するサブカテゴリーを生成する、④さらにサブカテゴリー同士を比較し、共通的な認知をまとめたカテゴリーを生成する、といったプロセスを繰り返す、概念モデルを構築する。また分析作業では、研究結果の信頼性、妥当性を確保するために研究者2名が互いにディスカッションを行

い、解釈が適正であるかの検討を繰り返し行った。

表1. 研究協力者の概要

	ダブルケア開始時の家族構成 ※ケア対象者は下線, 別居は ()	開始時の年代	ダブルケア期間	就労形態	介護負担	要介護者の状況	
						居住形態	要介護認定
A	妻, 子, (義母, 義父) ダブルケア中に第2子出産	40代	9年	会社員	副	近居	要介護2→5
B	妻 (妊娠中), (実父, 実母)	30代	7年	会社員→ フリーランス	副	別居→同居	要介護2
C	妻, 子, 義父, 義母, 義祖父, 義祖母 ダブルケア中に第2子出産	30代	4年	無職	主	同居	要介護1 要介護2
D	妻, 子, (実母)	40代	7年	会社員	主	別居	要介護3→5
E	妻, 子, 実母 ダブルケア中に第2子, 第3子出産	40代	5年	自営業	副	同居	要介護4
F	妻 (妊娠中), (実母)	40代	3年	フリーランス	副	別居	要介護3
G	妻, 子, (実母)	40代	3ヶ月	会社員	副	別居→同居	要介護3
H	妻 (妊娠中), 子2人, (義母)	30代	3ヶ月	会社員	副	近居→同居	要介護3

4. 倫理的配慮

研究協力者へは、調査を行うにあたり、研究目的と方法、データの取り扱いや情報の秘密厳守、研究協力への自由意思と撤回の自由などについて文章及び口頭にて説明を行い、同意を得た。なお、本研究は名古屋学院大学「人を対象とする研究倫理委員会」の承認を得ている。

5. 結果

5.1 分析テーマの結果

分析の結果、22のサブカテゴリーと6の概念的カテゴリーを生成した。まずは各概念的カテゴリーに対応するサブカテゴリーとコードの名称、データの要約を提示(表2)し、概念的カテゴリーごとに説明を行う。次に「男性ダブルケアラーの経験世界の概念モデル」を図式化し、ストーリー化した内容を述べる。概念的カテゴリーは《 》, サブカテゴリーは〈 〉, コードは [], 研究協力者の言葉は「 」, 省略は…で示す。

5.2 概念的カテゴリー

(1) 日常生活

男性ダブルケアラーの日常生活は多くの役割を担っている。まず〈親としての日常〉では、寝かしつけや朝の準備などの「子育てでの役割・日課」をこなし、複数育児や成長段階ごとの大変さといった「それぞれ違う子育て負担」や「子育てに向き合うストレス」を抱えている。一方、意識としては、妻の「子育ての補佐役」的立場であり、「一歩引いた子育て役割」, 「あまり苦労のない子育て」だとも感じている。また〈家事等の日課〉では、やれる範囲でやる、家族間で分担する等「部分的に担う

家事] を行うものの、手の出しにくさや揉めやすさなど [家事分担の難しさ] を感じている。さらに〈働く者としての日常〉では、会社員、自営業、フリーランスといった [様々な働き方] のなかで、[職場・役職の変更] に対応し、[申し掛かる責任] を受け止めながらも、[多忙な仕事] をこなしている。

男性ダブルケアラーは、これらの多忙な子育て中の男性の日常に〈介護者としての日常〉が加わる。要介護者の要介護レベルは幅広く、担っている介護役割も多岐にわたり、休日介護や泊まり込み介護など [多様な介護の形] が存在し、これには状態悪化・進行などによって [増加する介護負担]、認知症介護や出勤に影響する朝・夜間の介護など [過酷な介護生活] が含まれるケースも少なくない。さらに精神面では、要介護者の困った行動やぶつけられる不満等による [気の滅入る介護ストレス] とともに [見通せない先行への不安] に苦悩する日々といえる。さらに介護を分担している場合は、〈介護のサポート役〉として [主介護者のサポート] や [クロスする介護と子守のサポート] を行っている他、[他介護者のよき理解者] となっている。

このような多忙な日常は、[ケアの二重]、[過酷な日常]、[申し掛かる経済的負担] といった厳しい状況をもたらし、さらに妊娠中の妻のつわりと両親の入院が重なるといった [家族間で重なる入院・病気・出産・妊娠] が生じると乗り越えられない緊迫した事態に陥る。それは、怒鳴ってしまう、虐待を自分事のように感じるほどの [余裕のない精神状態] や自分がなくなっていくような感覚を抱く [削られる自分] を認識するほどであり、〈多くの役割を引き受ける過重負担の日々〉といえる。

(2) 家族との関係性

男性ダブルケアラーと家族は、そもそも良好、不仲、一定の距離をとっているなど [家族間の関係性は様々] ななかで、実母や妻、姑、きょうだいらとともに親や舅姑、祖父母に対する [家族を跨ぎ分担する介護] を行っている。しかし、この関係性は家族間で介護を提供する者と受ける者といった一方向的な面だけではなく、実親・姑に時々子守を頼んでいる、子の存在で介護に折り合いをつけられるなどの [関わりによる好影響]、家族間の言い合いを家族の他の誰かが仲裁する、家族を介して他の家族の話聞くなどの [家族が家族の仲介役] のように双方向的であり、家族同士の互助的な面を併せ持つ〈交錯する家族間ケア関係〉だといえる。

このような絡み合う家族間ケア関係のなかで、男性ダブルケアラーは要介護者及び他介護者に対して、[要介護者の状況理解] [他介護者の状況理解] をしつつ、互いに気遣い感謝しあうなど [要介護者と思い合う関係]、[他介護者との気遣い合い] がありながらも、こだわりや文句、攻撃的言動、提案や利用・入所に対する拒否などを受けるなかで、[要介護者とのぶつかり合い]、[負荷の大きい他介護者の言動] といった相反する感情を抱いている。さらには [介護をしない家族との軋轢] も生じやすく、〈家族への入り混じるアンビバレントな感情〉を抱えている。

この家族間ケア関係を維持するうえで、自分の生殖家族と自分や妻が生まれ育った双方の定位家族との間にどう折り合いをつけるかは重要なカギとなる。[妻・子の状況理解] は当然のこと、夫婦にとって [子の幸せが願い] であり、[夫婦間コミュニケーションは様々] な形で行われ、[妻への不満・心配] はありつつも、[互いを労わりあう夫婦関係] を築くよう努めている。子に対しては、否定しない子育てなどの [非伝統的な子育て観] と、父親は怖いとわからせるなどの [伝統的な子育て

表2. 概念的カテゴリー、サブカテゴリー、コードの一覧

サブカテゴリー	コード	データの要約
概念的カテゴリー1《日常生活》		
親としての日常	子育てでの役割・日課	躰け・怒る、朝の準備、寝かしつけ、風呂入れ
	それぞれ違う子育て負担	複数子育てで手一杯、食の細い子に苦勞、成長段階ごとの子育ての大変さ、一人目子育ての苦勞
	子育てに向き合うストレス	対処法のわからない子育て、男性子育ては大変
	子育ての補佐役	妻の息抜き時間をつくる、逃げ場になる役、休日の子守
	一歩引いた子育て役割	怒り役は妻、子と妻の緩衝材、口は挟めない子育て、子育てはほとんど妻
家事等の日課	あまり苦勞のない子育て	成長に伴う負担軽減、手のかからない子
	部分的に担う家事	家事の日課、やれる範囲の家事を、担当部分の家事
働く者としての日常	家事分担の難しさ	手を出しにくい家事、妻のチェックが厳しい家事、分担は揉める原因、わからない普段の勝手
	様々な働き方	会社員、専業主夫、フリーランス、自営業、自分の勤務状況
	職場・役職の変更	転職、起業、仕事で転居、異動、役職変更
介護者としての日常	伸し掛かる責任	代わりのきかない仕事、責任ある立場
	多忙な仕事	残業・持ち帰りでの仕事、仕事は体力勝負、急な仕事
	多様な介護の形	要介護者の状態は様々、身体介護、外出支援、家事支援、マネジメント・調整、経済的支援、金銭管理、契約・手続き、遠方介護、休日介護、泊まり込み介護、異性の身体介護への躊躇
	増加する介護負担	響く金銭面での問題、状態悪化・進行により増加する介護量、突発的な介護量増加要因の発生
	過酷な介護生活	厳しい認知症への対応、負担の大きい身体介護、負担が一極集中する同居家族、休めない介護、出勤に影響する朝・夜間介護
介護のサポート役	気の滅入る介護ストレス	要介護者の困った行動、要介護者の異臭、頻繁な喧嘩の仲裁、要介護者の無理な要求、こだわりで増える手間、要介護者からぶつけられる不満、正解がわからない介護
	見通せない先行への不安	終わりがみえない介護、見通せない先行、止まらない状態悪化
多くの役割を引き受ける過重負担の日々	主介護者をサポート	主介護者の補助役、主介護者ができないときの代打役、一時的な交代があたり前に、引負担を引き受ける
	クロスする介護と子守のサポート	妻への介護サポートとしての子守、妻への子守サポートとしての介護
	他介護者のよき理解者	介護者の精神的サポート、介護者の心情を慮る
	ケアの二重	ケアの二重、両者がいることで生まれる手間、病気のうつし合いへの警戒
概念的カテゴリー2《家族との関係性》	過酷な日常	ダブルケアは地獄、過負担を強いられるダブルケア、多方面への気遣いに困憊、回らない家、仕事ができないほどの負担
	伸し掛かる経済的負担	伸し掛かる経済的負担
	家族間で重なる入院・病気・出産・妊娠	安心して迎えられない妻の妊娠・出産、家族の病気、自身の体調悪化、家族のケアが重なり分担できない、トリプルケア
	余裕のない精神状態	怒鳴ってしまう余裕のなさ、虐待も自分事
	削られる自分	気遣いすぎて自分がなくなる、後回しになる自分
交錯する家族間ケア関係	家族間の関係性は様々	良好な家族関係、普通の家族関係、距離のある家族関係、不仲な家族関係
	家族を跨ぎ分担する介護	主介護者は実母・姉妹、主介護者は妻・姉、きょうだいで分担、介護家族を跨ぐ共同介護、お互い様の助け合い、乗り切れるのは大人の多さ
	関わりによる好影響	子の手伝いによる負担軽減、介護に折り合いをつけられる子の存在、孫のためなら我慢できる実親・舅姑、家事・子育ての助けとなる実親・舅姑
	家族が家族の仲介役	家族が家族を説得、家族間トラブルの仲裁役、家族を介して聞く話
家族への入り混じるアンビバレントな感情	要介護者の状況理解	要介護者の元来の性格、要介護者の精神状態・心情、要介護者の生活・経済状況、
	要介護者と思いが合う関係	本人を気遣う要介護者、家族を気遣った申し出、要介護者の性格を踏まえる、推し量る要介護者の意向・心情、要介護者を思った関わり
	要介護者とのぶつかり合い	要介護者の性格による問題、提案・利用を嫌がる要介護者、要介護者の強い入所拒否、要介護者と家族の衝突
	慮る他介護者の状況理解	他介護者の状況理解、他介護者の身体的不安、他介護者の性格、他介護者の介護役割、心の整理がつかない他介護者、慮る他介護者の心情
	他介護者との気遣い合い	自分を気遣う他介護者、自分を立ててくれる他介護者、気遣う他介護者の状況・負担、従う主介護者の指示、負担軽減の申し出、他介護者への感謝
	負荷の大きい他介護者の言動	要介護者に厳しい他介護者、他介護者の機嫌の悪さに疲弊、他介護者の攻撃的言動、提案・約束を受け入れない他介護者、入所を反対する他介護者、問題を押し付ける他介護者、他介護者の意向で思うように使えないサービス
介護しない家族との軋轢	家族内でケアする者は少数派、ケアをわかっていない家族への不満、介護しない家族からの入所反対、介護から逃げる家族、介護しない家族からの文句	

男性とダブルケア経験

サブカテゴリー	コード	データの要約
非伝統的価値観がベースとなる生殖家族	妻・子の状況理解	妻の身体状況、妻の性格・心情、妻の働き方は様々、専業主婦の妻、家庭によって異なる妻の仕事の比重、経済力のある妻、妻のケア役割、介護を担う妻への理解、子の状況、子との関係性
	子の幸せが願い	子が最優先、子の幸せが自分の幸せ、感じる妻と子の強い繋がり
	夫婦間コミュニケーションは様々	会話の多い夫婦、あまり話し合わない夫婦、妻との会話で自分は聞き役、ケアについて話し合う夫婦、同居をめぐり話し合う夫婦、喧嘩や言い合い、喧嘩できない夫婦関係、理解するための冷却期間
	妻への不満・心配	介護しない妻、家族から逃げる妻、怒りすぎる妻、子育て方針の違い、管理しすぎる妻、頑張りすぎる妻
	互いを労わりあう夫婦関係	気に掛ける妻の悩み・負担、夫婦間での気遣い合い・労り合い、自分を気遣う妻、夫婦互いの感謝・思いやり、妻の助けに
	非伝統的な夫婦の形	互いの家事に文句は言わない、妻との対等な関係性、妻が稼ぎ主、許されないとわかっている夫婦間での男尊女卑、妻にもたない役割期待、妻に怒らない
	非伝統的な子育て観	子に懐いてほしい、やりたいことはやらせたい、否定しない子育て、健康が一番
	伝統的な子育て観	父親は怖いとわからせる、子は妻が懐ける、獅子の子落とし
	様々な形の夫婦間での無償労働の協働・分担	ケア役割ははっきり分担、家庭内は妻で仕事は自分がメイン、無償労働は夫婦一緒に、夫婦間での無償労働の分担ルール
子にとってよかったかわからないダブルケア	子にとってよかったかわからない同居、子には残らない記憶、子にもめ事をみせるのは悪影響	
伝統的価値観が侵入する双方の定位家族との距離感	難しいきょうだいとの関係性	きょうだいの状況、きょうだいの性格・意向を理解、きょうだいとの気遣い合い、気に掛けるきょうだい間での負担度合い、きょうだいからのサポート、入所に反対するきょうだい、交流のないきょうだい、理解のないきょうだい、助けてくれないきょうだい、迷惑なきょうだい、攻撃的・批判的なきょうだい
	助けとなりつつも将来が心配な自立している親・舅姑	自立している側の実親・舅姑の状況、自立している側の実親・舅姑からのサポート、必要になったら自立している側の実親・舅姑にもサポートを、自立している側の実親・舅姑も心配、頼りづらい高齢・病気の自立している側の実親・舅姑
	双方の定位家族の非伝統的なジェンダー観・家族観	男女逆の夫婦の形に理解のある実親・舅姑、子夫婦に迷惑かけないが実親・舅姑のスタンス
	双方の定位家族の伝統的なジェンダー観・家族観	プライドの高い頑固おやじ、父に絶対従う母、嫁をもらったという感覚、長男と嫁がみる、要介護は知られたくない恥
	推し量る双方の定位家族との距離	自分・妻と親・義親との関係性、自分・妻にいてほしい親・義親の思いを推し量る、心理面と物理面が安定する距離をとる、生殖家族と定位家族に距離を持たせる、関わってこれても困るきょうだい、介護に妻と子を巻き込まない、子に負担をかけない
概念的カテゴリー3 《社会支援との関係性》		
上手く活用できるか要のフォーマルサービス	生活に合わせて活用するフォーマルサービス	保育サービスの利用、定期的な介護サービスの利用、都合に合わせたサービス調整、一時的な入院・入所、医療・障害サービスの利用、自費サービスの利用
	マッチしない利用基準・制約	同居介護に厳しい利用基準、マッチしないヘルパーの利用基準
	あっても使えないフォーマルサービス	使えない・増やせないフォーマルサービス、施設サービスに対する不信、高額な入所費用、ニーズに合わないフォーマルサービス
	頼りになる専門職	専門職から要介護者への利用・入所の説得や促し、要介護者への丁寧な説明、専門職の迅速な対応、ケアマネからの情報提供
助けとなったインフォーマルなつながり	あてにならない専門職への不満	強くは踏み込まない専門職、専門職とのトラブル
	知人・友人・職場仲間に相談	友人に相談、職場仲間に相談・愚痴、顧客からの助言
	力を貸してくれた支援団体	一緒に調べてくれた支援団体、ダブルケアと教えてくれた支援団体
地域から向けられる厳しい目	地域の伝統的なジェンダー観・家族観	家族介護で潰れるが美学の田舎のケア観、多様なライフスタイルに理解のない田舎、介護は女が一般的、褒められる男性子育て
	近所から指される後ろ指	専業主夫に対する近所の批判の目、入所に対する近所の批判の目
概念的カテゴリー4 《仕事との関係性》		
家族を思い仕事との両立に奮闘	仕事が自分の時間	仕事が自分の時間
	働くのは家族のため	妻からの稼ぎ手としての期待、働くのは作った家族の安定のため、仕事のために家庭を犠牲にしない
	大変な仕事との両立	介護が大変でも仕事、仕事の先行への不安、遅く出勤して早くは帰れない、ずっと変わらない職場
	ケアによる仕事へのマイナス影響	収入面への影響、仕事を抑える不安、失う仕事・顧客、ケアのための転職・離職、過負担による退職、ゆとりを持ったための転職、やりにくくなった仕事、ケアのための遅刻・休み
	仕事に連動する家庭への影響	仕事の不安定が家庭の不安定に、多忙期に妻にかかる負担

サブカテゴリー	コード	データの要約
環境の後押しが大きいワーク・ライフ・バランス	両立を考えた働き方	自分で組み立てやすい働き方、フレキシブルな働き方、心のゆとりができたフリーランス、スケジュールのやりくり、仕事の力加減
	理解・配慮のある職場	融通のきく職場、家族介護の知識があった職場、上司の理解、職場からの休暇制度の提示
	休業・休暇制度の利活用	育休取得、特別休暇の活用、家庭の事業に合わせた育休取得
	融通が利きやすい立場	職場での立場、自分がシフト管理、仕組みより大切な職場環境
舵取りできない状況・環境・立場	両立しづらい働き方・状況	仕事も踏ん張り時、家庭を優先しづらい立場、家庭と仕事が分けにくい自営、長期間は仕事に支障、メンタル面で仕事に影響、介休取れなかったことで離職
	休業・休暇制度の取りづらさ	取りづらい急な休み、続けては取りづらい育休と介休、取れなかった介休、収入面で使えない育休
	理解のない職場環境	仕組みがあっても取得に厳しい職場、当たり外れがある職場・上司の理解、整っていない休業・休暇制度
概念的カテゴリー5 《ダブルケアに向き合う心》		
ダブルケアに向かうそれぞれの意味	様々な始まり方	シチュエーションは様々、徐々に始まった介護、突然始まった介護、介護により大きく変化した生活
	子育て生活からのダブルケア	介護前の日々、介護の予兆、介護要因の発生、同居でのダブルケア、考えていなかった介護
	介護生活からのダブルケア	結婚前からの介護、介護を中心とした生活、子が生まれてダブルケア、仕事と両立していた介護生活、ぎりぎりの収入で生活、ダブルケア前に介護離職
	ダブルケアに向かう心境	やれるのは実子だから、わからないまま始まった介護、経験・知識・ツテのあった介護、自覚・覚悟のなかったダブルケア、自ら望んだダブルケア、予測していた同居介護、他にはなかった選択肢、きつかった開始当初
	児童・青年・若年期からのケア意識	児童・青年期の様々な家庭・地域環境、児童・青年期に担った家事・ケアの家庭内役割、元々持っていた家事・ケアへの意識、結婚前のライフスタイル
	自分にもある伝統的なジェンダー観・家族観	女は従え、男女ともにある性別役割意識、変えられない性別役割意識、老いては子に従え
	自分の介護観	若者が高齢世代の犠牲になってはいけない、自分は子に介護させない、避けられない家族介護、要介護であっても自宅生活できる
下支えする思い	家族の未来のために、家族を介護で潰さないために、自分たちの生活を守ることが一番、損したくないという気持ち、要介護者への思い・恩	
追い込まれる自分	難しい心のコントロール	感情的になってしまう言動、なんで自分だけがという心境、変わってしまった要介護者に対する動揺、自信の喪失、メンタルが保てない、厳しい決断をする苦悩、将来への悲観
	孤立する自分	子育てでも介護も人に話さない、ケアラーと知られるデメリット、人に頼る余裕がない、相談する余裕がない、周囲に気付いてほしい
	いい面は思いつかない	思いつかないいい面
ダブルケア生活の先に見出す豊かさ	育まれる家族の豊かさ	子の成長にプラスの影響、要介護者の自立意識を促したダブルケア
	自分に返るダブルケアの価値	自身の成長につながる経験、感じた親の愛情・苦労、感謝する舅姑に助けられている今、仲間ができた
	今後に活かすダブルケアで得た教訓	介護経験から得た教訓、経験を仕事に活かす、人に伝えるケアのいいところ
経験から蓄積したノウハウ	自身の状況理解	自分の身体状況、自分の性格
	乗り越えるためのセルフマネジメント	先のことを不安視しすぎない、発想をポジティブに転換、両立できる生活リズム、正しかったと自分に言い続ける、方針を決める、逃げる自分を肯定する、作り出す自分の時間、割り切る強い意志、感情的にならない
	円滑にいくためのテクニック	みつけるいい対処法、技術・知識の取得と活用、迅速な相談とサービス利用、早め早めがポイント、断る・離れるテクニック
概念的カテゴリー6 《家族を守るためのマネジメント》		
家族全体を考えたマネジメント	先を見越したマネジメント	先を見越したマネジメント、将来リスクの予測、家族間トラブルの予測、優先順位を考える、持続可能な仕組みを作る
	家族を考えて導いたベターな結論	導いたベターな結論、家族で話し合って決める介護方針、家族・身内全体が安定するバランス、決めていく介護・サポートの限界ライン
自分を信じて孤軍奮闘	状況からの自身の判断	同居・別居は自分の意向、家族・身内に関する判断、在宅介護は厳しいと判断、自分で決めた介護方針、自分が納得できないと、介護に決定権のない自分
	犠牲を覚悟してでもみつける落としどころ	落としどころをみつける、悪者になっても家族の幸せのため、自分と生殖家族のために見切る
	家族を思い強権を発動	反対があっても押し通す、強権を発動、要介護者を説得・言い聞かす、経験させてわからせる、妻に意見を押し通す、定位家族に言わせない、家族の意見に強く反対、

観]が入り混じっているものの、妻との関係性は対等である昨今、夫婦間での男尊女卑は許されないとわかっているなど、[非伝統的な夫婦の形]がみえてくる。このようななか、妻は子育て、自分は介護のようなケア役割型、妻は家事・ケア、自分は仕事のような性別役割分業型、役割を分けずに夫婦一緒に行う協働型など[様々な形の夫婦間での無償労働の協働・分担]でダブルケア生活を乗り切っている。男性ダブルケアラーにとって家庭はこのような〈非伝統的価値観がベースとなる生殖家族〉だが、[子にとってよかったかわからないダブルケア]だとも感じている。一方、〈伝統的価値観が侵入する双方の定位家族との距離感〉を測ろうとする心情も窺えた。自身と妻双方の定位家族には、要介護者や他介護者以外にも、[難しいきょうだいとの関係性]、[助けとなりつつも将来が心配な自立している側の実親・舅姑]との関係性がある。そこには、子夫婦には介護で迷惑をかけたくない、妻が稼ぎ手という旧来の形に囚われない夫婦の形に理解があるなど[双方の定位家族の非伝統的なジェンダー観・家族観]がみられる場合もあるものの、父に絶対に従う母、嫁を貰ったという感覚など[双方の定位家族の伝統的なジェンダー観・家族観]が根強く、「一回受け入れてしまうとそこからどんどん慣れてきてしまうっていうのがわかっていたので、物理的な線引きをしておかないといけないっていうのが常にありました」、「喧嘩してもしようがないってわけじゃないですけど、楽しい時間のほうがいい、要らんこと言ったり、要らんことやったりして、まあやることもないって考えている」のように非伝統的な価値観に基づく生殖家族と[推し量る双方の定位家族との距離]によって、両者の関係を崩さないよう努めているのである。

(3) 社会支援との関係性

ダブルケア生活を維持するうえでは保育や介護、その他医療・障害福祉などの[生活に合わせて活用するフォーマルサービス]、[頼りになる専門職]の存在は欠かせない。しかし、同居介護に厳しいなど[マッチしない利用基準・制約]、「ショートステイはもう絶対行きたくないみたいで、その話をしても何か一向に話が進んでいかない」のように費用面や要介護者本人の拒否で使えない、「命は守るけど生活は守れないみたいなレベルのところがすごくあって」のような施設サービスへの不信などで[あっても使えないフォーマルサービス]、家族間の意向が折り合わなかった場合でも専門職は強くは踏み込んでくれないなど[あてにならない専門職への不満]も感じており、〈上手く活用できるかが要のフォーマルサービス〉だといえる。加えて、ケアや家族に関する悩みや不満を[知人・友人・職場仲間に相談]する、[力を貸してくれた支援団体]とつながるなど〈助けとなったインフォーマルなつながり〉からのサポートも得ている。一方、インフォーマルなつながりでは、地方に根強い家族介護を美学とするケア観、多様なライフスタイルへの理解のなさといった[地域の伝統的なジェンダー観・家族観]、専業主夫や親を入所させることに対し[近所から指される後ろ指]など〈地域から向けられる厳しい目〉に晒される場合も少なくない。

(4) 仕事との関係性

男性ダブルケアラーは[仕事が自分の時間]という面はありつつも、[働くのは家族のため]という思いをもち、[大変な仕事との両立]を図っている。それは収入の減少や仕事を抑える不安、仕事

量をセーブすることによって失う顧客や仕事の依頼、さらにはダブルケア転職・離職など多くの〔ケアによる仕事へのマイナス影響〕、それに伴い生じる〔仕事に連動する家庭への影響〕を痛感するなかで、〈家族を思い仕事との両立に奮闘〉しているのである。このような厳しい局面を回避するうえでは、〔両立を考えた働き方〕が重要となるが、これは〔理解・配慮のある職場〕であること、〔休業・休暇制度の利活用〕ができること、職場で〔融通が利きやすい立場〕にあることなど職場〈環境の後押しが大きいワーク・ライフ・バランス〉といえる。それは、仕事が踏ん張り時である、自営などで家庭と仕事の区分けがしづらいなど〔両立しづらい働き方・状況〕では、また〔休業・休暇制度の取りづらさ〕などのある〔理解のない職場環境〕であれば、〈舵取りできない状況・環境・立場〉となり困難に立たされる。

(5) ダブルケアに向き合う心

子育てと介護のダブルケアといっても〔子育て生活からのダブルケア〕と、〔介護生活からのダブルケア〕とではそのシングルケア時代の生活は大きく異なる。またそれ以外にも〔様々な始まり方〕があり、自ら望んだ、他には選択肢がなかったなど〔ダブルケアに向かう心境〕は一様ではない。加えて〔児童・青年・若年期からのケア意識〕、〔自分にもある伝統的なジェンダー観・家族観〕を自認しつつ、若者が高齢世代の犠牲になってはいけぬ、家族介護は避けられないなど〔自分の介護観〕をそれぞれもつなかで、家族の未来のため、家族を介護で潰さない、損したくない、要介護者への思い・恩といった〔下支えする思い〕を胸に〈ダブルケアに向かうそれぞれの意味〕を見出している。

厳しい状況にある男性ダブルケアラーの心情は、ダブルケア生活の〔いい面は思いつかない〕ばかりでなく、「このときは本当にもういっぱい過ぎて人に頼る余裕もなかったですね」、「一番しんどい時期に自ら発信するのは結構厳しかったり、その発想に至らない」、「介護しているってことを言うと周りからみたらあんまり触れたくないというか、仕事先の人もそこを考慮してつき合うのって面倒くさいが強いと思うので言わなかった」などの〔孤立する自分〕、なんで自分だけがという心境や感情的になってしまう言動、将来への悲観などの〔難しい心のコントロール〕といった〈追い込まれる自分〉に途方に暮れていることも珍しくない。一方、厳しい状況にありながらも子の成長や要介護者の自立意識にプラスの影響をもたらしたといった〔育まれる家族の豊かさ〕、自身の成長や親の愛情・苦勞を感じたといった〔自分に返るダブルケアの価値〕、「自分たちのときは、一回家族で元気なうちに介護サービスの計画を話し合うといい」「苦しさだけでなく子育てのよさだったり楽しさもいっぱいあるし、介護の楽しさも嬉しさもいっぱいあるので、両方を伝えていくことが一番大事なのかなと感じる」といった〔今後に活かすダブルケアで得た教訓〕なども感じ取っている。

加えて厳しいダブルケア生活を乗り越えるため〔自身の状況理解〕をするとともに、発想をポジティブに転換する、逃げる自分を肯定する、強い意志で割り切るなどの〔乗り越えるためのセルフマネジメント〕、仕事や不安要因への対処を早めに行う、相談やサービス利用を迅速に進める、断る・離れるテクニックを身につけるなど〔円滑にいくためのテクニック〕といった、〈経験から蓄積したノウハウ〉を駆使している。

(6) 家族を守るためのマネジメント

男性ダブルケアラーは将来リスクやトラブルを予測し、優先順位を考えるなどの「先を見越したマネジメント」、家族の意向を踏まえて、全体が安定するバランスを図り、介護・サポートの限界ラインを決めるなどの「考えて導いたベターな結論」のように〈家族全体を考えたマネジメント〉に努めている。介護について決定権のない場合もあるものの、同居・別居の判断や介護方針等についての「状況からの自身の判断」は、家族の幸せのため、自分と生殖家族のために「切り離さないと切れない…見切ることでみえてくる世界もあるんじゃないかなって思ったんです」「犠牲にしたのはおそらく母親本人の一番の願いでしょうね。ずっと子どもと一緒にいる時間をつくりたいって…それを犠牲にしたといえはしたと思う。ただ、それをやればすべてが崩壊するので、その選択はしないっていう風に決めたということです」のように「犠牲を覚悟してでもみつける落としどころ」であり、そこには、「みんなが不幸にならないための方法を俺が考えるから、老いては子に従えというんだから息子に従え、悪いようにはしないから息子に従っていう、母に対しても、妹に対しても強権的な発言をしましたね」のように反対があっても押し通す、言い聞かすといった「家族を思い強権を発動」させることをも覚悟する〈自分を信じて孤軍奮闘〉する男性ダブルケアラーの姿が浮かび上がった。

5.3 概念モデルの構築とストーリー化

カテゴリー間やサブカテゴリー間、またはカテゴリーとサブカテゴリーのつながりや関係性について検討を行った結果、「男性ダブルケアラーの経験世界の概念モデル」を図1に示した。

男性ダブルケアラーの《日常生活》は、〈親としての日常〉や〈家事等の日課〉、〈働く者としての日常〉、〈介護者としての日常〉、〈介護のサポート役〉など多方面にわたり、過酷な日常や申し掛かる経済的負担、余裕のない精神状態など〈多くの役割を引き受ける過重負担の日々〉だといえる。そして、その生活を支えるため、また成り立たせるために必要な多方面との関係性がある。まず《家族との関係性》では、ダブルケアはケアをめぐる〈交錯する家族間のケア関係〉のなかで、介護で関わる〈家族への入り混じるアンビバレントな感情〉を抱いている。そこでは、〈非伝統的価値観がベースとなる生殖家族〉と、〈伝統的価値観が侵入する定位家族との距離感〉を押し量っている。また《社会支援との関係性》では、生活を維持するうえで欠かせない〈上手く活用できるかが要のフォーマルサービス〉、特に知識・メンタル面で〈助けとなったインフォーマルなつながり〉がありつつも、伝統的なジェンダー観や家族観などが根強い〈地域から向けられる厳しい目〉にも晒されている。さらに《仕事との関係性》では、〈家族を思い仕事との両立に奮闘〉するも、職場・働き方等〈環境の後押しが大きいワーク・ライフ・バランス〉であり、〈舵取りできない状況・環境・立場〉では困難に立たされる。

これら日常生活、ケアで関わる他者との関係性の他に、自身の内面世界がある。《ダブルケアに向き合う心》では、ダブルケアの始まり方やダブルケアに向かう心境、その他様々な思いがあるなかで、〈ダブルケアに向かうそれぞれの意味〉づけをしながら、セルフマネジメントやテクニックなどの〈経験から蓄積したノウハウ〉によりダブルケアへの対応力を高めている。またダブルケア経験のなかで〈ダブルケア生活の先に見出す豊かさ〉を認識しつつも、孤立し、心をコントロールできなくなって

いく〈追い込まれる自分〉を感じている。そして、このような日常生活の過酷さ、家族や職場、社会との関係性、自身の心情が絡み合うなかで、それら全体の状況を踏まえ、《家族を守るためのマネジメント》に奮闘している。それは先行やリスクを予測し、導いたベターな結論に向かう〈家族全体を考えたマネジメント〉であり、そこには、〈自分を信じて孤軍奮闘〉する男性ダブルケアラーの覚悟があった。

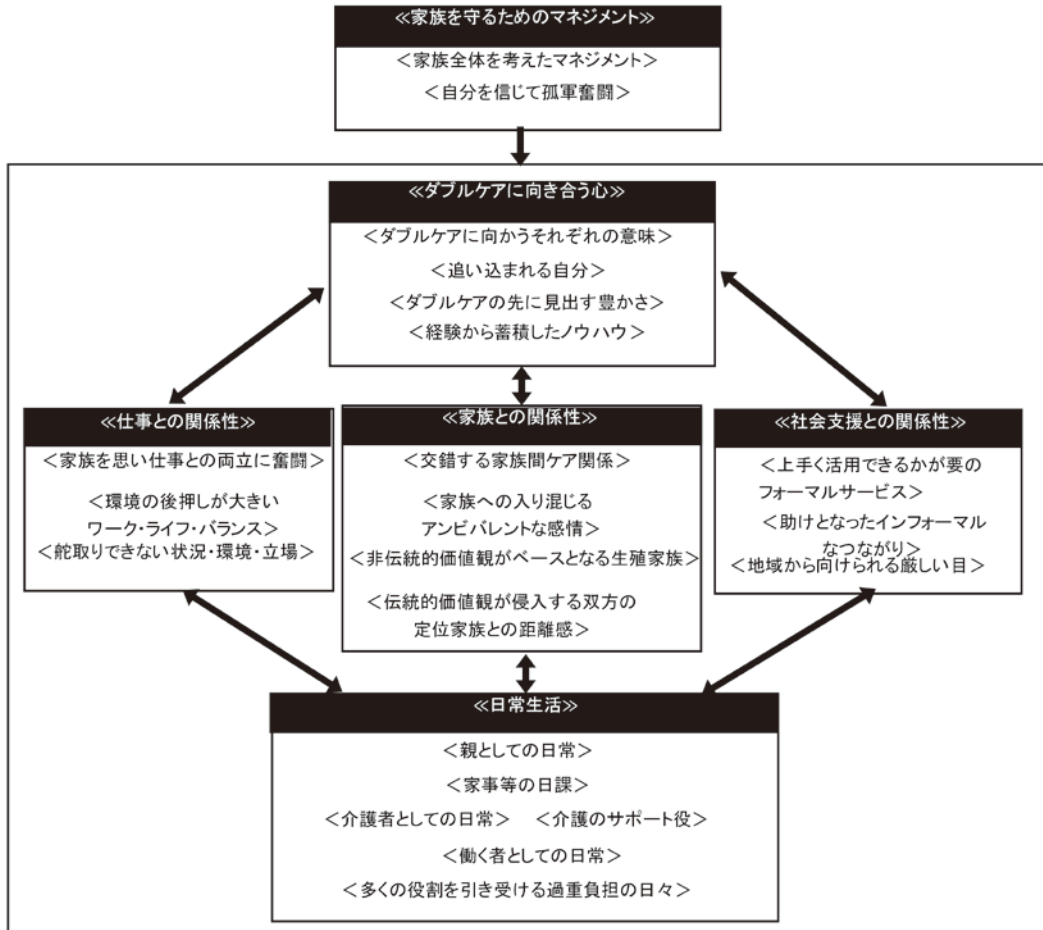


図1. 男性ダブルケアラーの経験世界の概念モデル

6. 考察

分析からわかるのは、男性ダブルケアラーは「自分の生まれた家族をとるか、つくった家族をとるかの二者択一の選択」(春日1997: 45)をするのではなく、自分のつくった家族を守りながら、あるいはそれを守るために、生まれた家族、そしてときには妻の生まれた家族に対しても介護責任を果たすという困難な選択をしているということである。ここにおける男性の役割は、従来の稼ぎ手役割か

ら「変化している」というよりも、むしろ「増えている」と描写するほうが適切であろう。稼ぎ手役割から降りることが自身のためにも家族のためにもできないまま、妻との間の平等主義的な役割分担意識により家事と子育てをできる限り分担し、また自身の親や妻の親からの介護期待にも平等に応えていかねばならない。しかし、男性が家族を「守る」ということが第一義的に稼ぎ手役割を果たすということであると男性自身が認識しているなかで、子育てや介護のためにその役割を犠牲にするという選択は選ばれにくい。実際、ダブルケアによって離職や業務量を減らした男性は先に言及したように約2割にとどまっている（内閣府男女共同参画局 2016）。だが同時に、「男女共同参画」「ワーク・ライフ・バランス」が推進される社会のなかで、子育てや介護、家事において役割を担わない、という選択もまた非難を受ける。研究協力者のなかでも、家事全般と介護を主となって引き受けている者から、家事を分担しつつ子どものことは主に妻に任せて自分は介護に集中するといった者まで、負担度合いや方法はそれぞれ異なるが、家族の状況をみて交渉しながら自身の家庭内での責任を果たそうと奮闘している⁴⁾。

この過重負担は、夫婦間で解消できる問題ではなく、実際妻に対して「こうしてほしい」「もっとこれをやってほしい」といった要望を語る男性ダブルケアラーは研究協力者のなかにはいなかった。よく語られたのは職場に対する要望であり、長い労働時間のために家庭時間が足りないなか、育児休業や介護休暇の取りづらさへの言及が多くみられた。また、理解のある職場に恵まれた者は自身の介護に関して満足を語っている。男性もケアを担うということを前提とした労働環境の整備が求められる。また、企業に対してだけでなく、自営業やフリーランスといった多様な働き方を視野に入れた対策が必要である。

加えて、介護サービスを思うように利用できず、介護負担を家庭で抱え込んでいる実情も浮かび上がった。これはダブルケア家庭の実情に合った利用時間の延長や同居介護に厳しい利用基準の緩和を求める声もあったが、特に多くの男性ダブルケアラーから聞かれたのは、要介護者本人や家族の反対により介護サービスを利用できないといった問題であった。現在の介護保険制度では要介護者本人の意向を尊重したサービス利用が原則であり、家族介護者と要介護者本人の意向が対立した場合、どの程度介入・調整が図られるかはケアマネジャー等専門職個人の考え方や力量の差によるところが大きい。2023年10月厚生労働省はケアマネジャーがケアプラン作成の際などに用いる「課題分析標準項目」の一部改正を通知し、従来「介護力」と表記されていた項目が「家族等の状況」へと名称変更された。この通知のQ&Aでは、「これは家族等を介護のための資源とした一面的な捉え方を改めるものであり、家族等それぞれに生活があることを踏まえ、家族等の介護への参加意向や負担感を十分に確認すること」と記載されている。家族全体が安定するバランスを考え、利用に至るまでをどう支援・サポートするのかといった相談支援のあり方が問われているといえる。

また、女性ダブルケアラーとの違いに注目すると、家庭内における男女のジェンダー役割の興味深い差異に気づくことができる。女性ダブルケアラーは「自分、夫、要介護者家族みんながよい方向へ行くようにと考え」つつ、まず何よりも目の前にいる子ども・要介護者の要求に応えることに奔走している。そのために同時に要介護者の世話によって子どもや夫に犠牲を強いてないかと「引け目」を感じ、そのような自分の身体的・精神的負担に対峙するために「セルフマネジメント」を行っている

(澤田・伊東2018:134)。セルフマネジメントが必要なのは、引け目を感じながらケアをする彼女たちが何よりもまず自分を犠牲にしているからである。また自身に過剰にかかるその負担に関してその不満をしばしば夫の消極的な関わり方に向けている(澤田2020:93)。

対して男性ダブルケアラーは、目の前の子どもや要介護者の要求に対応する前提として自身と家族、特にその生殖家族の将来をまず見据えており、「家族を守るためのマネジメント」を行っている。それはしばしば、要介護者をはじめとする定位家族にとっては「冷たい」対応にも映る。女性のケアスタイルが、まずは周囲の要望に応じていく「足し算」型であるのに対し、男性のケアスタイルは先を見据えたうえで優先順位と必要なことを決め、そのためには家族の誰かの要望を切り捨てることも厭わない「引き算」型であるといえる。息子の介護が、親の心身の機能を維持したいという目的のもと、「介護しすぎない」という「ミニマムケア」になることは平山も指摘しており、彼らはしばしば「手を出しすぎる」姉妹や妻と衝突している(平山2014:183-192)。本調査に協力してくれた男性ダブルケアラーも、妻に対する不満は、「怒りすぎる」「管理しすぎる」「頑張りすぎる」といった、妻の過剰な介入や負担の抱え込みに対してであり、「介護しない」という消極性に対する不満を表したのは少数派であった。またきょうだいとの関係に関しても、女きょうだいは親の介護にかなりの程度関わっている副介護者、ときには主介護者として言及されるが、男きょうだいはその存在が言及される程度でそもそも介護役割が期待されていない。

家族の舵取り役として常に将来のことを考えながら、男性ダブルケアラーは妻や女きょうだい、自身や妻の定位家族と調整を図りつつ日常を営んでいる。定位家族は性別役割分担意識が高く、要介護状態を「恥」とみなすなど伝統的価値観が強く残っている親世代である。それに対し自身の生殖家族は子育てにおいても家事の分担においてもベースは平等主義的、個人主義的な非伝統的価値観である。子育てだけでなく介護に関わる男性ダブルケアラーは、この親世代がもつ伝統的価値観に対応しながら、自分の生殖家族の生活も成り立たせている。このとき、男性ダブルケアラーが行っているのは生殖家族と定位家族との関係の調整である。生殖家族の時間や余裕をつくるために親の介護サービス利用を説得したり、妻と妻の親との口論を仲裁したり、自身の親ときょうだいの間に入ったりと、守るべき家族が自分の直系家族ひとつではないなかで、そして自身の定位家族と妻の定位家族の健康・自立状態の危ういバランスのうえでダブルケアを行うなかで、彼らは優先順位をつけながら、「家族を守るためのマネジメント」を行っている。これは、私的領域において発揮される能動的な調整力であり、私的領域においては「受動性そのもの」(平山2017:202)であった男性性とは異なる男性性の表れ方である。

7. おわりに

何をどう負担するかというダブルケアの内実には様々な濃淡がありながら、調査対象の男性ダブルケアラーたちに共通していたのは自分の家族を「守る」という意識であった。戦後日本社会において男性が家族を守るというのは家族のために稼ぎ手になるということを意味してきた。この稼ぎ手役割意識は強固に存在するものの、男性ダブルケアラーたちの語りからは家族を「守る」ということの新

たな内実と意味付けも読み取ることができる。それは、自身の考え方と家族のニーズを調整し、導いていくという家族という私的空間における積極的な役割であり、「稼ぐ」という公的空間における活躍とは根本的に異なる男性の役割である。それは周囲から「仕事もせずに何をしているのか」「奥さんは何をしているのか」と批判されようとも、当の男性自身にとっては「家族を守る」こととして、自身の男性性を毀損することなく意識されている役割意識なのである。

このような男性の家庭関与のあり方は、大野が「家族する」と名付けた応答的關係としてのそれである。それは、家族を「つねに既にそこにあるもの」としてとらえ、それゆえに關係の調整に関わらない「受動的な位置」に自分を置く男性（平山2017：199）とは大きく異なるものである。さまざまな役割を日々なんとかこなしながらのケアによってつながる生殖家族と定位家族の危ういバランスのもとで、男性ダブルケアラーは、その關係が安定していないからこそ、そして何を優先させるべきか答えがないからこそ、変化するその状況と家族のニーズを見極めながら日々マネジメントを行っている。このマネジメントは男性が女性や子どもを「守る」という既存のジェンダー規範に沿ってなされているが、公的領域ではなく家族という私的領域で発揮されることによって、新たな男性性の可能性も見出すことができる。その可能性の拡大のためにも、社会的な支援が今求められている。

注

- 1) 総務省による「令和3年社会生活基本調査」では、男性の家事時間は2001年の31分から2021年の51分と増加傾向ではあるが、女性の家事時間は2001年の3時間34分から2021年の3時間24分と微減であり、その男女差は依然大きい（総務省 2022）。
- 2) 定位家族とは自分が子どもとして生まれ育った家族のことを、また生殖家族とは自分が結婚して築いた家族のことを指す。
- 3) インタビューガイドは、①ダブルケアの経緯・状況をお聞かせください、②支援・サポートの利用状況、関わり方、期待や不満についてお聞かせください、③家庭内でのケア役割の分担と関わり方について教えてください、④ダブルケアが始まる前と後で、家事の分担や仕事量に変化はありましたか、⑤ケア役割や家事の分担についての期待や不満についてお聞かせください。また、あなたの配偶者はどのような期待や不満を抱いていると思いますか、⑥求める支援・サポートと利用条件についてお聞かせください、とした。
- 4) 妻との間の平等意識のもと、責任を果たそうとする男性ダブルケアラーであるが、子育てと家事に関しては基本的には女性の領域だととらえる遠慮があるようにも思われる。妻との立場は対等であるから家のことは分担しなければいけないと考えているが、同時に女性の領域を侵してはいけないとも考えている。私的領域におけるジェンダー平等を目指すのであれば、男性がそこに「参加する」割合を増やすだけでなく、女性の側においても子育てや家事を自分が責任をもつ領域ととらえそのルールを「押し付ける」のではなく、男性側にその領域を開放し男性のやり方も同様に正しいのだと考える必要があるだろう。

引用・参考文献

江原由美子、2012「社会変動と男性性」『揺らぐ男性のジェンダー意識——仕事・家族・介護』目黒依子・矢澤澄子・岡本英雄編、新曜社、23-37。

- 平山亮, 2014『迫りくる「息子介護」の時代——28人の現場から』光文社新書。
——, 2017『介護する息子たち——男性性の死角とケアのジェンダー分析』勁草書房。
- 岩上真珠, 2007「戦後日本の家族はどう変わったか」『「家族」はどこへいく』沢山美果子・岩上真珠・立山徳子・赤川学・岩本通弥著, 青弓社, 65-102。
- 春日キスヨ, 1997『介護とジェンダー——男が看とる女が看とる』家族社。
——, 2001『介護問題の社会学』岩波書店。
- 厚生労働省, 2022「国民生活基盤調査」(2023年12月5日閲覧<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa22/index.html>)
——, 2023「介護保険最新情報Vol.1179」(2023年12月12日閲覧<https://www.mhlw.go.jp/content/001157102.pdf>)
- 内閣府男女共同参画局, 2016「育児と介護のダブルケアの実態に関する調査」(2023年5月9日閲覧http://www.gender.go.jp/research/kenkyu/wcare_research.html)。
——, 2023「男女共同参画白書 令和5年版」(2023年12月10日閲覧https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r05/zentai/index.html)
- 成田光江, 2018『複合介護 家族を襲う多重ケア』創英社。
- 目黒依子・矢澤澄子・岡本英雄編, 2012『揺らぐ男性のジェンダー意識——仕事・家族・介護』新曜社。
- 大野祥子, 2016『「家族する」男性たち——おとなの発達とジェンダー規範からの脱却』東京大学出版会。
- 大槻奈巳, 2012「雇用不安定化の中の男性の稼ぎ手役割意識」『揺らぐ男性のジェンダー意識——仕事・家族・介護』目黒依子・矢澤澄子・岡本英雄編, 新曜社, 134-153。
- 佐藤郁哉, 2008『質的データ分析法——原理・方法・実践』, 新曜社。
- 澤田景子, 2020「育児と介護を同時に担うダブルケア当事者への支援実践に関する検討」『経済社会学年報』(42), 84-96。
- 澤田景子・伊東眞理子, 2018「ダブルケア(育児と介護の同時進行)を行う者の経験世界の構造と支援課題に関する一考察」『経済社会学会年報』(40), 129-140。
- ソニー生命・相馬直子・山下順子, 2017「ダブルケアに関する調査2017」(2023年5月9日閲覧https://www.sonylife.co.jp/company/news/28/nr_170317.html)。
- 相馬直子・山下順子, 2013「《3》社会の変化からコミュニティ経済の必要性を考える1ダブルケア(子育てと介護の同時進行)から考える新たな家族政策—世代間連帯とジェンダー平等に向けて」『調査季報』171:14-17。
- 総務省, 2022「令和3年社会生活基本調査 生活時間及生活行動に関する結果」(2023年12月3日閲覧<https://www.stat.go.jp/data/shakai/2021/pdf/gaiyoua.pdf>)
- 津止正敏, 2021『男が介護する——家族のケアの実態と支援の取り組み』中公新書。
——, 2022「データが示す男性介護者」『結婚とケア』平井晶子・落合恵美子・森本一彦編, 有斐閣, 460-470。
- 上野千鶴子, 2011『ケアの社会学—当事者主権の福祉社会へ』太田出版。